
V S ・ G A M E 『バーサスゲーム』

青い絵 八代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

V S ・ G A M E 『バーサスゲーム』

【Nコード】

N 3 6 3 9 Z

【作者名】

青い絵 八代

【あらすじ】

エイリアンの侵略により、世界は混沌としていた。それに、普通の人間は気づかず、平和に過ごし、少しずつ、奴らに生活の全てをコントロールされていく。

しかし、そのエイリアンの弱点は格闘ゲームだった。彼らは戦闘種族であるがゆえに、格闘ゲームにもものすごく嵌る。そのせいで、格闘ゲームで負けると死ぬという、禁断の文化が発祥し、エイリアンは、楽しみに暮らしていた。その弱点を利用するため、政府は格闘ゲームの天才達を集めることに。

【少女と先生】 (前書き)

前に中途半端に書いた、小説の改稿版です。

【少女と先生】

雑踏を動かす一つの権力者がそこにはいた。ずっと、歩いて一つの目的地へと向かっている。

無数に通り過ぎる、人々は何を考えているのか。

そして、今見上げた太陽には何が隠されているのか。きつと、それは誰も知らない。

八手は、ふと気づくことがあった。一瞬だけ、周りにいる人間が全員、怪物に見えた。八手は、錯覚か何かだと思ったが、それが予兆だった。

世界を揺るがす、大悪夢の。

そんなことがあったので、じっくり目を擦ってみると、どうやら元の普通な人間達だった。

八手は、仕方が無いので、時計を確認する。

「しまった、時間がない」

全力で、約束のゲームセンターに向かう八手。今日は、格闘ゲームの大会があるのだ。

その格闘ゲームには大まかに三種類があるのだが、エクストリームファイトを八手は好んでしている。エクストリームファイトの一番の特徴は、技がなかなか決まらないことである。ガード力がすさまじいのだ。ゆえに、多くの人は犬猿する。勝負がつかないとされるからだ。

だが、八手にとってそれは単なる遊戯だった。

息切れ切れになって、ようやく会場に到達した。

そこには、多くの人たちが、コントローラー片手に、暗闇の中画面をのぞいていた。

八手は、とりあえず受付を済ませると、コーラを買おうと、外に出た。

その時、一人の少女が彼を見ていた。

「あの…」コーラを注文している八手に話しかける、少女。

「何？」

八ちは、緊張してぶっきらぼうに言い返す。

「あのね。良かったら、私に格闘ゲームの何たるかを教えてくれな
い？」

「君…、格闘ゲームファン？ いまや、格闘ゲームは影のブーム。
君も大会に出るのかい？」

「いいえ、私は超下手っぴ！」「自慢げに言う、少女。

「名前は？」

少女は、黒髪にリボンをつけていた。割と清楚だ。

「黒田みちる、です。ご指導お願いします」

八ちは、ゲーマーとして思ったのが、その少女がかなりホンモノ
の格闘を極めているようであるということ。が、本質的に違うもの
なのでなんともいえない。

才能があるかもしれないので、一つ腕試しをしてみようと思う。

「じゃあさ。『相手が、二回連続でパンチかキックをしてきました。
両方ともヒット。あなたはどうかやって回避しますか』」

みちるは、にっこり笑って答える。

「もちろん、こちらもパンチをするんだよね」

「そう、ここで逃げるのは、駄目だ。相手の実力が高いときは、ぶ
つかっていくことで、相手をひるませる。しかし、それは不完全な
答えだ」

みちるは、不思議そうな顔をする。

「一つ言っておくが、技には弱点がある。技の弱点を突くことをし
なければ、そのパンチは決まらない。そんな風にやっていると、一
つ一つの動作に対する対処が見えてくる」
以上。

ということ、授業終了。

「どうだ？ 少しは分かっただろ？」

「

「うん。師匠、ありがとう」

その時、ハチは持っていたコーラを、その少女に渡す。

「がんばれ」

そうして、ハチは大会へと向かったのだった。

廊下を、歩いて、会場の扉を開け、席に座った。

「僕が、コントローラーを持ったときから勝負が決している」

敵は鋭い目でこちらを見てくるが、所詮ハチの敵ではなかった。

彼は、いずれ、レベル と呼ばれる存在になる。そのことは、まだ誰も予想すらしていない。

僕は、大会に優勝し、帰宅するところだった。そのため、エレベーターに乗っていた。ここからは町が見える。ガラス張りだからだ。こんなときふと、思い出してしまふ。一年前の世界中の大停電を。一ヶ月も夜が真っ暗だった。

その時、人類は夜の本当の姿を知らなかったことが浮き彫りになった。夜とは、何があっても可笑しくない最悪な時間なのだ。もしかしたら、本当に何かが起こっていたって可笑しくない。

誰も。

誰も。

誰も。

もう、恐れてはいないだろう。しかし、僕にはどうしてもふに落ちなかった。何故だろう、あれからどこにいても恐怖ばかり感じる。

これは、一体。

僕は、そんなことを考えていながら、エレベーターを降りようとした、その時、エレベーターの出口の正面に謎の黒服の男が居た。

「私はエイリアンだ」

僕は、額にこぼれる汗、激しい動揺を感じていた。

しかし、なんとなくコイツはエイリアンではない気がした。エイリアンは、そもそも名乗るだろうか。

「あんだ、うそついでるアル」

僕は、「冗談で切り抜けようとした。

「ふっははっはは」

笑う、エイリアン。いや、エイリアンはそんな楽しげに笑わないぞ。

「すまんすまん。ジョークだ。実はだ、我々のプロジェクトに協力してほしいんだよ。裏世界では、有名なレベル 君」

「やっぱり、人間だったか」

「その通りだよ。でも、これは単なるジョークではない。腕試しというものだ。お前は、動揺しながらも、ジョークを言った。凄い洞察力だよ」

「あー」

僕は、ふと話題に困った。

コイツに何を話しても、笑われそうな気がした。

なので、沈黙する。

「どうした？」

「…」

沈黙。

「この世界は…、実に普通だ。何も起こらない。人は、もう誰も苦しんでいない。なーんて、思っている人間は世界一愚かだ。お前が見ている視野なんて、小さなものだ。いや、大きすぎてもいる。視野は狭く、おおきすぎて細かく観れない。全くバカだよ、そういう人間は。しかし、君はそうは思っていない。違うか？」

「何が言いたい？」

「君を、凄い器が持つものとして勧誘したいのさ」

僕は、カバンから、大会の優勝賞を見せた。

「コレに関係しているな？」

「ふっはっはっはっは」

また、笑いやがった。

むかつくなあ。

「お見通しと言うわけか。君を、狙っていたのは事実だが、まさか優勝するとは思っていなかったよ。だって、お前…実績が少ないから」

「まあ、大会に出るのは滅多に無いけど。ここ数年は、地道に練習していたんだ。裏世界でね」

裏世界について説明すると、一部の人たち（格闘ゲーム）だけが参加できる特殊回線があり、そこは最上級の人間たちが集まるゲーム世界なのだ。

「うーん、あの回線はちょっと入ると、逆ハッキングされるから、困ったよ」

実は、そのシステムを作ったのも、僕だ。

割と簡単に作ったことを記憶している。

まあ、それくらいのことではできる。

「君が、格闘ゲームで優勝したことは大いに関係している。この世界には凶悪な怪物が存在している。それらは、人類を今、貪り食っている。あらゆる人が、もう洗脳されかけている。君も同様だ」

洗脳されている？

僕が？

謎の黒服の男は、鏡を取り出した。

「この中に、この鏡面世界に今…エイリアンが住み着いているのだ。信じられないだろうがな」

「はあ？ お前、それってどういうことだ」

「人間に観られたくない、エイリアンは、鏡の世界を牛耳り、いずれ…本物の世界を喰う」

鏡を、僕はふと見た。

すると、映っていたのは、僕じゃなかった。

「怪物…」

僕は、怖気づいて、後ろに倒れた。

「ようこそ、我々のプロジェクトへ」黒服の男は、不気味な顔でそう言った。

殴られて、何時間か過ぎた頃、気がつけば、僕は謎の閉鎖的施設にいた。

頭を抑えて、痛みを和らげていると、そこには見慣れた仲間が居た。

物は何も無い部屋だが、人は居た。

「おい、お前、ラッキーセブンのセブンじゃん？」

「あつ、レベルのハチ？ 久しぶり」

実は、セブン（シチ）とはゲーム中まで小さい頃は、よく戦って勝ったり負けたりしていた。

お互い、かなり強くなったので、次にあつたときは決着を付けるという理由で、お互いにお互いを卒業したのだった。

そして、これが久しぶりの再開だった。

このイカレタ、白い施設で、僕達はこれからエイリアンと戦うことになる。ただし、ゲームで。

そのエイリアンは、知的戦闘種族らしい。

【少女と先生】 (後書き)

あとがきなんて、書くもんか。

一回戦 エイリアン 【ギガンテス】 (前書き)

格闘物語は、ついに動き出す。

一回戦 エイリアン 【ギガンテス】

「汝、ゲーマーとして問うのであるが、どの程度のものかね？」
彼は、悠然にもラッキーセブンのシチにそう語り始めた。

のんきに、王様の椅子に座っている八チは、何処となく本調子が出てきたような感じだ。

それもそうだ、運任せながら全てを凌駕する宿命の相棒との再会があつたのだから。

「あの…、それは実際に勝負したほうが早いぜ。実はこの部屋…」
「分かつてるよ。世界中の格闘シミュレーションゲームが、勢ぞろいなんだろう？ 俺でも持つてないのもあるな…」

八チは、両手でコントローラーを、回転させながら、考える。

ここまで、用意周到なのは、ゲーマーに用があるからだというのが明確だ。だが、何が目的でゲーマーによるのがあるのだろう。それは、レベル として考えればすぐ分かるはずだ。

『鏡面の世界のエイリアン』、それがキーワードだな。

「シチ！ お前、何か知ってるんだろ？」

「ああ、当然な。でも教えられないな、秘密だ」

ところで、シチはずっと片思いですつと告白できずにいる童貞野郎であることは、もう笑っちゃうとこなんだけど。まあ、こいつもプライドって言うのがあるって、八チは考えた。

そこから、いろいろ状況を踏まえていくと、シチ以外の奴らにもそれが聞こえる大きさで言うと、どうなるのかな？

「あのさ、シチは、ずっと彼女ができないし、告白もできない…どうっ」「口を押さえる、シチ。

彼の黒髪の影響に、真紅の瞳が見えた。

その時、八チはシチに思いつきりぶん殴られた。

「いてー、最低な奴だな。人を殴るなんて」

「こっちのセリフだ。秘密を人に思いつきり大きな声でばらしやが

って。俺の面子をどうしてくれる！」

「面子なんて気にするな！ あほー」

「（キレた）」

そうすると、シチは、格闘ゲーム『L O O ・ J U S T ・ A N E T』を取り出した。この部屋にあったものだが、超レアな限定版であったが…今はそれどころではない。

ゲームっていうのは、売られた勝負は買うものだ。

そう思い、ハチは、コントローラーを、シチに向けて掲げる。

「俺は、レベル だ！」

五分後、準備OK。でかいスクリーンが、登場。大画面の、超迫力。

このゲームは、随分前のもので、確か2030年発売元であるバノコナが二つのゲームを融合して一つの型に収めた究極のゲームといわれている。

まあ、このゲームは二人でよくやったのだが。

きつと、シチも分かっている。

『このゲームでもっとも大切なのが、一瞬でも攻撃の隙を与えないこと。そうしないと一気に決められる。それに、シチは運任せの連続技がめちやくちや強い。だが…』

二人は、同時にキャラを選択し、ゲームスタート。

ハチは、美男子戦士を選んだ。

シチは、多重人格戦士を選んだ。

勝負は真剣だった。

気がつけば、ギャラリーが居た。

美男子戦士は、高速で動き、多重人格戦士を惑わしている。

多重人格戦士が、攻撃に回った。

『見えた』

高速で動き、攻撃に転じようとした多重人格戦士の、背後へ行った美男子戦士。

『このキャラ特有の、スピード。それを生かしていけば、一気に勝てる。また、このフィールドの特徴である壁の存在、そこならもう逃げ場も無い』

美男子戦士は、連続技をして、さらに最大必殺技である、ソルドクラッシュを決めた。

「勝負は、ソッコー。にひひひ」

大笑いする、レベル。

「くそつ、もう一回・今のは絶対マグレだ！」

「いいけどよー。勝つのは俺だからね」

ハチこと、レベルは、後ろに倒れて深呼吸して思う。格闘ゲームは、凄く充実する。こんなに楽しいものはない。何より、戦った仲間とのコミュニケーション。これは、何者にも変えられない絆だ。こんな幸せになれる、格闘ゲームが自分は大好きだ。

しかし、そんなことを思っていると、次のゲームをする暇もなく、部屋の扉から例の男が入ってきたのだった。

「いやいや、見事だったよ」黒服の偽エイリアンだ。こいつなんかむかつくんだよな。第一印象悪し。

「つて、お前…」彼はいろいろ言っつてやろうと思ったが、後ろを見ると。

じーっと、その偽エイリアンを尊敬するまなざしを感じた。

どういうことだ？

「凄いなだぜ。ハチ」

「何が？」

「えっ？ しらねーの。三十年前に居た天才格闘ゲームー佐々木龍之介の息子佐々木龍神だぞ」

「佐々木龍神？ アイツが？」

「遺伝だよ、遺伝。今では、影の影の影の世界の格闘ゲームの天才だ。影にいようとするとこころもそっくりだぜ」

彼は、思い出した。佐々木龍之介は、死んでから有名になったゲームーだったと。

「雑談はその辺にしたまえ」龍神、いや黒服の偽エイリアンでいい。奴は、また高らかに笑った。そして…。「君たちに、始めの鏡試練をを与える。エイリアンの名は、ギガンテス。割と簡単に倒せると思っぞ」

エイリアン【ギガンテス】だと。

なんか凄く強そうだ。

本当に強いなら、早く勝負したいが…。負けたら死ぬんじゃ…（汗）。

「おいおい、お前達はプレイしない。安心しろ。お前達は、奴隷を操るんだよ」

「奴隷？」一同は疑問に思う。

「お前達を信頼する、雑用だ。お前達は、その奴隷に指示を与え、勝ちへと導く。ちょっと、難しいけど。私がやったところ上手く行った実例は多いぞ」

「ふーん、面白い」そう、はっきり言う八子。「このゲーム、本当はかなり難しい。みんな、気をつける」

もう、後には引けない。

それにしても、家で帰りを待っている、両親はどうなったんだろう。勝てたらメールをしよう。きっと、事情を説明すれば分かってくる。

信じなければ、越えられない壁もあるから、自分は信じたい。

レベルの真の力も。人の思いも。

一回戦 エイリアン 【ギガンテス】 (後書き)

あがきなんか書くもんか。書きたい奴だけ書けばいいんだ。あ
とがきなんて絶対書くものか！。

統一回戦 エイリアンは美食家【（前書き）】

ハチは、この世界中の誰よりも強い、格闘シュミレーションゲームマー。

続一回戦 エイリアンは美食家】

彼の名前は、ハチ。通り名は、レベル。そんな彼は、エイリアン退治に強制的に参加させられることになり、いささか動揺していた。それでも、これからたくさんゲームができるということで、落ち込むことをする必要は無かった。

「シチ、どう思う？ さっきの黒服の男。可笑しいだろ、自分で自分で退治をしないんだ？」

「えっ、それは簡単だよ。あの人だけじゃ追いつかないのさ。それくらい、鏡面世界のエイリアンは増殖している。単純な話だよ」

「ふーん」

ハチはコントローラーで持ってイメージした。この組織には不明な点が多い。

主催者は誰か？

鏡面世界の退治を何故するか？

ここは一体世界中の何処に位置しているか？

何もかもが、分からないままここにいる。

このままじゃいけないな。

ハチは、そう考え、この白いゲーム部屋から外に出ることにした。しばらく、廊下を歩いていくと、食堂、カラオケ屋、床屋、などと様々な施設が完備されていた。しかし、どうだろう。人が全く居ない。

気がつけば、彼は道に迷っていた。

そんな時、たまたま鏡を見つけた。

それをつつかり見たことが、駄目だった。

思ったとおり、怪物達が、こつちを見ている。何か、とんでもない世界に彼は迷い込んでいるということに気づいた。

しかし、帰り道を探らなくては…と思っていると後ろに黒服の男が居た。

振り返る、八子。

その男は、厳格な態度を持って、八子を殴って気絶させた。そのため、八子は意識を失い、気づけばコントローラーと画面しかない密室にいたのである。

いろいろ気にはなつたが、ゲームをしろ！　ということだろう。一つモニターには、僕が推したボタンが表示される。もう一つは、通常の戦闘画面だ。

しばらく、それをいじっていると、奴隷から通信が来た。

「すみません、プレイヤーさん。あなたは凄いですって？」

「はい、そうです。お任せください。この世界で一番強いゲーマーです。いずれ、佐々木龍之介を越えるでしょう。それより、あなたの名前は？」

「えっ？　どうして？」

「僕は、奴隷なんて呼び方は嫌です。それが信頼となります。絆です。教えてください」

「荻谷です」

名前を、聞くと、僕はさっきまで構築した作戦の全貌を様々な面から指示した。

その通りにやってくれば、あとは大丈夫なはずだ。

しかし、荻谷はきつとゲーム初心者。細かな技の出し方の説明も必要だろう。

「Aと　が、必殺技です…」
続ける。

「Bが、ミドルキックです。Bと　が…」
しばらく、話し込む。

そして、ちょうど終わった頃に、鐘が鳴った。

その時、目の前に超鏡面空間が生まれ、エイリアンの姿が見えた。その姿はおぞましく、見ているだけで吐き気がする。

「ワガハイニハカテン、ギガガガガガ」
液体が垂れている、そして目が緑色。

ハチは、それでも全く動じなかった。

「はつきり言う」

ハチは、皮肉をこめて言った。

「バイオハザードのほうか怖いね。また、そう考えれば世の中に怖いものは無いんだぜ」

高らかに笑う、レベル。

その目は、エイリアンよりも鋭く、真紅として、真っ直ぐなのだ。つた。

それでも、エイリアンは、自己紹介した。

「ギガンテス、トイイマス。ギガガガガガ」

その不気味な自己紹介は、常人に最大の恐怖を与えた。

『怖い』と奴隷である荻谷は言った。

「荻谷さん。落ち着いてください。僕がいる限り、彼は豆粒同然です」

とりあえず、勝つか…。

ハチは、冷静に、エイリアン【ギガンテス】のステータスを考慮していく。

再び、鐘が鳴る。

深遠な、響く音。

ハチは、さつそくプレイボタンを押した。

このゲームは、『N2W』という随分昔の格闘ゲームで、特殊能力で戦うゲームだ。それ以外は、他と変わらない。キャラは、割と美男子が多い。

彼は、美男子【WAR】を選んだ。

敵は、超美男子【NOT】を選ぶ。

すると、一気に戦闘は展開した。

彼の指示通り、荻谷は戦況を打破していった。

しかし、ギガンテスはあっさり、その戦術を看破し始めた。

対戦を見ている限り、このギガンテスと言う奴は、操作に美学が溢れんばかりだ。さすが、知的戦闘種族だ。今までのやり方では、

もう…。

「ありえない。だが、これは実践で全く無いわけではなかった。まさかここまでとは…」

そのエイリアンが、異常な進化能力を持っていることに、啞然とした。

その時、一番怯えていたのは、荻谷だった。

レベル を信じる気持ちと、敵の強さがぶつかり合う。

しかし、一気にライフポイントが、同等に。

これでは、押され負ける。

そんなとき、レベル の力が覚醒した。

無限の戦闘パターンの中から、すべての情報を統合していく。

何もかもが、統合され、いずれ一つになる。

その時、すべての、闇は晴れた。

八手の目が、七色に輝く。

八手は、通信ボタンで静かに伝えた。

「 してください」

その後、一気に勝利した。

ギガンテスは、もう手を出せない。

完全に、攻略した。

その後、荻谷サンと対面した。

「なんで、あんな策を？」

「簡単ですよ。相手が、勝とうとしていたから」

Q、問題です何を指示したでしょう。

A、このゲームの地形を利用して欲しい。この地形は、段差が多い。そこで待ち構えていることこそ、勝とうとしている相手を一回だけ打破する方法。それくらい、エイリアンも勝てると思っ込んでいた。イレギュラーが、このゲームを制した。

しばらくして、賞金が与えられた。エイリアンは秘密裏に死刑になったそうだ。どの道、奴は敗北したせいで、仲間には喰われるのだから、可愛そうでも在る。

それにしても、ゲームって最高。

指示を与え、疲れ、ベッドに横たわる。

上を向いて、八子は呟いた。

「何してんだろ、僕。こんなに充実感があるのに……。何か足りない」

その瞬間、横に一人の男が居るのに気づいた。

「ワツハツハ。君は、根暗だな」

黒服の男、偽エイリアンが居た。

「あんたねー」彼は冷静に突っ込んだ。

「このゲームは、単なる遊びじゃないんだ。それを教えたくてな」

「は？」

「よく聞け若造」八子は、ビクツとした。「この世界で一番だとしても、誰の役にも立たなかったら、それは一番じゃない。たとえば、この世界で一番駄目だとしても、誰かの役に立っていたら、それは一番だ。それと同様、これはゲームだ。それも、お前が人として変わるためのな。それを教えておきたかった。恐らく、その素質はお前には無い。だから、俺たちが全力でサポートする」

「どうして…？」

「勝つんだよ、八子。奴らに、エイリアンに」

「？」

「そのうちに答えが見つかる。シンプルな話さ」

八子は、少し、考えてそれが真実だと思った。誰かの役に立つことが、この世界にいる根本の理由だ。害の在るものは、存在を許されない。

月明かりが、部屋を照らす。

そんな中ふと思うのだった。

自分は、今までゲーム以外のものに関心が無く。周りのことなんて考えなかったことを。

何かが、分かりそうで分からない、そんな月夜の出来事だった。

爽やかに、笑う八チ。

「嗚呼、人に頼られたの初めてかも知れないな」

∴。

∴。

続く。

統一回戦 エイリアンは美食家【（後書き）】

あとがきが、死んだ？ 本当か。あとに書くと言っておいて、前に書いたって、本当か？ あとがきは書かなければ、あとがきは残さなければ、ただの無言。

僕は、出て行くよ。このあとがきからも。もう、あとがきなんか書くものか。

二回戦 組織の…(前書き)

格闘ゲーム第二幕。

二回戦 組織の…

組織について、偽エイリアンは、こんなことをまた教えてくれた。「エイリアンを、倒すことが目的のようで、実は別に目的があるのさ」

「何だよそれ？」

「金だよ。金。エイリアンは、この世のものじゃない資源をたくさん持っている。それを買って奪いたいんだ。それに、エイリアンの存在自体にも組織が絡んでいる」

「マジか？ もっと教えてくれ」

「今の君に話せるのはコレくらいだ」

僕は、そんな風一気に秘密を教えてくれた、偽エイリアンを尊敬のまなざしでみた。しかし、あいつは。

「ハッハッハッハ」と笑ったので。

凄く、ムカツクの気持ちに変わった。

「お前も…、ちゃんと考えろよ」偽エイリアンの最後のそのセリフが、とても、重かった。

まあ、今考えても仕方ないことだ、とハチは分析した。

翌日、ハチは朝食を取るため、完備されている売店へと足を運んだ。

ハチは、夢うつつのまま、あくびをした。そして、しばらく店内を散策し、サンドイッチとジュースを手に取り、レジへ。

その後、ハチは、サンドイッチをほうばりつつ、廊下を歩く。

その頃には、意識もはっきりしてきた。

ようやく、ゲームの在る部屋へ到着すると。

みんな、さっそく格闘ゲームで遊びまくっていた。

画面が一台しかないのだが、画面が六分の一に分割され、多くの人が遊んでいた。

ハチは、いくつもある、ベンチに座り、その試合を観戦した。それにしても、どれもこれもレベルが高い。

皆、コンピューターの戦術をはるかに越えている。そんなことを思いつつ、ジューズを飲んでみると、ある人間が話しかけてきた。

「あかさ。一回勝負しない？」

その男は、真っ直ぐな金髪の白い服を着た、黒いオーラを感じる男だった。

「僕は、ハチ。君の名前は？」

「ボクは、プロフェッショナルワンの、イチだ。どーも」

…、プロフェッショナルワンって、いつもネットで自分と互角にやりあつたあいつか？

ハチは、歴然と動揺する。

まあ、コイツが、本当にプロフェッショナルワンか試す意味でも、勝負したほうがいいか。

「裏ネット社会じゃ、僕と互角だったよな？」

「はつきりいって、アレは本気じゃない」

…、何？

「人生は、格闘ゲームに似ている。倒すか、倒さないか。たとえ、どんな敵でも、技を生かせれば勝てる。そんな風に考えていくと、恐れるものなんて何も無い。それが、いかに強い相手でも」

ハチは、この瞬間思った。こいつとの戦いも、倒すか、倒さないかだと。

「じゃあさ、僕が君を倒すよ。レベル の真の本気で」

ハチは、能力がありいかなる場合もあらゆる方向で格闘をシュミレートすることが可能だ。しかし、今日の前に居る敵はそれを越えている。

その事実にも、ハチは怖がらず、むしろ面白いと思った。

「面白いね、本当」

ハチは、言う。

「すべては勝つか、負けるか。そして、レベル の進化は止まらない

い

しばらくして、空気が変わる。

お互い、ゲームをセットし、コントローラーを握った。

そう、ハチはすでにこのゲームの勝敗を見ていた。

ギャラリーは、この寮の全員にまでなっていた。

今回、使うゲームは、『グロス・コーティングM』。2024年四月、このゲームは圧倒的技の量であらゆるゲーマー達を混乱に落とし入れた。上級者達を除いて。

しかし、このゲーム単に技が多いだけで、お気に入りの技をよく理解しておくことが大切なのである。そんな風に、このゲームは次第に皆に受け入れられていった。

また、キャラの特徴は、騎士であること。騎士はたくさんの武器を装備しているので、ビジュアルがカッコイイ。子供は、それが目当てで買っていたそうだ。

ハチは、龍騎士を選択。

イチは、緑戦士騎士を選択。

ゲームスタート。

白熱する、バトル。

ハチは、さつそくアームブレードで攻める。

イチは、すかさずガード。

しかし、ハチはガードをすることを読んでいたので、ガードが切れたタイミングで、上にふつとばす、攻撃。

イチは、先手を取られた。

ところが、イチはこれが狙いだった、上から下の攻撃は、重力もありダメージが高い。

よって、剣で下を斬る。

ハチに、大ダメージ。

ライフは、ハチ20/イチ28。

「まだまだ」レベルは、集中する。「見えた」

八手は、遠距離にまで攻撃が届く弓矢を使った。
これは、なんとかヒット。

イチ19。

?した。

イチ10。

?した。

イチ5。

イチ0。

「よっしゃーア」八手は、高らかに喜んだ。

「くそう」イチは、ひがむように落ち込んだ。「さすがだ…、お前は自分のキャラを熟知している。負けだ」

「そう負けたんだよ、イチ」八手はしゃがんで言った。「現にお前も強い。だけど、きつとこれはもつと強くなれってことなんだ。もつと強くなれって教えてくれている。そう思えば、何も辛くは無いさ」

そこには、戦ったもの同士が存在していたのだった。

シチは、その時冷静に勝負を見ていた。

イチに勝った八手の凄さに圧倒された。

…。

「格闘ゲームって、きつと闘うためじゃないんだね。通じ合うためなんだね」

シチは、そんな風に思ったことを八手に言った。

実は、八手とシチの寮部屋は一緒なのだ。

八手は、二段ベッドの上に寝ている。

「まあね。大切なことを表しているんだよな、どうしても闘わなくちゃいけないときがきたら、通じ合うことからはじめたいものだよな」

そして、このエイリアンとの戦争も、通じ合うためにできたら、それが一番いいことだ。

八手は、おもむろに、窓の外からかすかに見える、星空を見上げ

てみるのだった。

…。

…。

その中で、きっと誰もが探している、たった一人の愛する人に出
会えるはずだから。

…。

…。

END

？||連続攻撃 あのととき、イチのキャラの動きは弓矢によって封
じられていた。そこで一気に決める算段を立てたということ。

二回戦 組織の…(後書き)

あとがきを書ける、こんな幸せなことがあるか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3639z/>

V S ・ G A M E 『バーサスゲーム』

2011年12月18日10時47分発行